

『ちご』の教育

高橋 俊 乘

四 鎌倉時代以後兒の多くなつた原因

鎌倉時代にチゴの多かつた事は、次のやうな文獻によつても知られる。順徳天皇御撰の禁祕抄卷中「御持僧事」の章に

自兒召仕者、近比多元服望藏人申官位。末代彌此儀多歟、可有用意。

とある。その意味は、身柄の貴い御持僧が、召仕つてゐた兒が、元服して仕官を望む場合に御持僧の口入推舉する風が當時行はれ、是れから末にもいよゝ此の議が多くなるであらうから、頗る注意すべき事であると仰せられたものであるが、近比多の多とは何の意味であらうか。禁祕抄によると、天皇の頃は御持僧の数が八九人ほゞ有つた。その口入推舉することが昔より多くなつたのか、兒の中で、元服して仕官する者が多いと仰せられたのか。「御持僧事」といふ章全體の意味から言へば、前の意味らしいが、近頃多元服望藏人申官位とある文章形式から考へると、後の意味であるら

しい。前の意味とすれば、天皇は持僧の推舉の多いのを歎かれたのであるが、後の意味をとれば、多くの兒が得度しないで、元服するのを歎息せられたと解しなければならぬと思ふ。

つまり、やゝ意味が不明であるが、とにかく兒から出た朝臣が少くなかつた點は右の文で知りうると思はれる。

又參考源平盛衰記卷四十二によると、東寺本平家物語に、源義經が讃岐の屋島の平氏を攻めようとして、阿波に上陸し讃岐へ山越しをした時の條に、

大道ヨリ一町許入テ、大ナル森ノ中ニ、御堂ト覺シキ所ニ、人音ノシケレバ、アハレ是ハ平家ノ勢ト覺ユルゾ。イザヤ寄テ一戰セントテ、押寄テ見給ヘバ、サハ無テ、里ノ者共ノ十八講行フテゾアリケル。此者共肝魂ヲ失テ、方々へ逃去ヌ。武藏坊馬ヨリ下テ、今度ノ軍ニ打勝テ、講ノ座ニコソ着テ候へ。入セ給テ面々ニ行セ給ヘト申ケレバ、判官ヲ始奉テ、御堂ニ下居テ、各取行フ。思寄ズ講行フタリ。講式ハ法師ノ讀物ナレバ、辨慶讀ト宣ヘバ、辨慶申ケルハ、幼少ヨリ天台山ニ候シカドモ、學問スル事ハ思寄ズ候。太刀刀ノ柄ヲ取り、狩漁ヨリ外ニ營ム事モ候ハズ。僧モ僧ニ依、俗ニ依事ニテ候。此中ニ兒立ノ人讀給ヘト申ケレバ、ドツト咲テ立レケリ。

「兒立」といふ語は、こゝでは兒から出た武士といふ意味である。かゝる單語のあつた事は當時の武士の中に兒出身の武士の少くなかつた事を示してゐる。尙兒立といふ語は恐らく朝臣にも使ひうる語であらうが、私はまだその用例を發見しない。一體右の東寺本平家物語の大坂越の記事によると、その時、義經の部下には八十騎ほどしか無かつた。その中で、義經と辨慶は明かに兒立である。それ以外に尙若干人數、兒立の武士が居つたといふのである。平家物語の文章から察すると、八十騎の中で、兒立の武士は義經、辨慶以外に一人や二人では無かりさうである。長門本平家物語の同じ記事の所では、伊勢義盛が日光ソダチノ兒ナリケレバ、兜ヲ脱デ傍ニ置、矢負ナガラ禮盤ニ上テ講式を讀上げたとある。

兒を多く置くやうになつたのは、色々の原因が有つたであらう。しかしその根本の原因はかうであらうと思ふ。つまり佛教が當時の文化の中心であつて、文學でも藝術でも皆佛教の畑に於て發達した。儒者でも皆佛を念じ後生を祈りつゝ、經書を講じた。従つて法體の政治家や軍人や學者が少くなかつた。又僧侶は種々の特權を與へられ、身分の低い者でも立身出世が出來たので、その爲に僧侶となるものが少

くない。世の中に望を失つた者が、世の中から離れようとして佛教に安住の境界を求め、爲に出家するものもある。因果を恐れ、後生を怖れて剃髮する者もある。従つて又子供を出家させて、親の菩提を弔はせようとするものも随分多かつたらしい。更に、當代は武家時代であるから、常に戦争がある。戦に敗れた者が討死する時に、その子や妻に子供を出家させるやうに遺言した例が多い。或は遺言がなくても、遺族や遺臣が、そのやうに取計らふ事が多い。例へば木曾義仲は幼時、中原兼遠に養はれたが、兼遠は義仲を「幼少ヨリ手習シテ學問ヲモシ法師ニナシテ誠ノ父母ノ孝養ヲモセサセ、我等ガ後生ヲモ弔ハセント」かねてから思つてゐたと長門本平家物語十二卷に見えてゐる。

又敗軍の武士がその子を敵の殺害から逃れさせる爲に寺へあづけて弟子にすることもあり、又孤兒になつた武士やその他の者の子を寺で世話する例が多い。但しこの二件は必ずしも出家しない。唯、寺で養はれるだけの事もある。鹽谷高貞が高師直の爲に不慮の死を遂げた時、三歳の子を法師になし、尼の弟子とした。後、還俗し、師の名を尊んで、尼子氏を名のつたといふ傳説がある（塵塚物語雲州軍話）。正平十七年伊豫で河野通朝は細川頼之に攻められて、城が陥り、自害した時、その息男徳王丸はまだ

童形であつたが、陣中の僧が抱いて、戰場を逃れ、難波の大通寺で養育した。後に惠良の城で元服して、六郎通堯と名のつた（環章記）。永享の亂に足利持氏と子義久が亡んだ時、義久の弟、安王春王は日光山へ落ち、その弟永壽王は瑞泉寺昌在西堂が懷に抱いて甲斐へ逃れた（鎌倉大草紙）ことは著名な例である。

翻つて寺院の側から見ると、佛教が盛んな時であるから、富裕になる。弟子、兒童子を多く置くやうになるのは當然である。もとよりこれは、寺院生活を賑やかにするに過ぎないのであり、殊に翫童の弊風が、それにつきまどふのであるから、まじめな修行者は、兒や童子を多くおく事を避くべきであらう。明惠上人は、寺の收入が豊かになると、兒ども取置き酒宴し兵具を提げ、るやうになるからとて、北條泰時の寄進を謝絶した話は前號第三節に既に引用した通りである。今昔物語に「法花經ヲ日夜ニ讀誦シテ年ヲ積んだ或聖人が弟子ヲ離レ童子を棄テテ、獨リ居テ一心ニ法花經ヲ讀誦した話（卷十三第六話）が載つてゐる。しかし一般には僧侶も俗にひとしく、榮華、奢侈を喜び、多くの兒童子を集めて賑やかに暮したがつた。故に寺院より稚兒を探すことも多かつた。一寺院に於ける兒の定員の確定してゐるわけではないが、例へば今日官廳の給仕の如き、假りに四人ゐる中で、一人でも缺けると、その代りを探して、補充す

るやうに、何人かの兒の中で一人でも缺けるとすぐ、その一人を補充することは、普通行はれたことらしい。例へば宇津保物語に

去年までは親の服に侍りしかば籠めすゑて侍りしを、國分寺の童べのあきたる事のさぶらふなど申しき。この童べを法師ほしがり侍りつる云々(樓の上)

といふ例がある。寺で兒や童子を置くことは、平安時代末佛教が盛んとなり、社會的勢力の増進するにつれて愈盛んとなつた。

平安時代末鎌倉時代始ごろより兒の増加した原因として、私は以上の三件をあげたいのである。

五 翫童の風俗

僧徒の男色の風俗は古くからあつた事であらうと思ふ。我が國では普通に弘法大師が始めたと言ひ、文殊菩薩が始めたと言はれてゐる。かういふ言ひ傳へは何時ごろから始つたことか私は知らないものであるが、恐らく室町時代の事かと思はれ、江戸時代初期の本には既に見えてゐる。例へば、弘法大師が始めたといふ説は醒睡笑卷之六に見えてゐる。この著は安樂庵策傳が元和九年(二二八三)に笑話を集めて板

倉重宗に贈つたものである。文殊菩薩が始めたといふ説は中江藤樹の翁問答下卷之末に見えてゐる。これは寛永十八年の著である。更に古く室町時代文明壬寅（一四二〇）の作「若氣勸進帳」に弘法大師が始めたといふ説が見えてゐる由を松屋筆記卷六十六に載せてゐるが、私はまだこの本を見る機会をえない。

文殊菩薩は理想上の超人格であるから、歴史以外であるが、弘法大師が始めたといふ説は誤であつて、それ以前から、我が國にもあつた。例へば續日本紀によると、天平寶字元年四月の條に

先帝遺詔、立道祖王、昇爲皇太子。而王諒闇未終。陵草未乾。私通侍童、無恭先帝、居喪之禮、會不合憂（卷二十）

とあるのは、僧徒の事ではないが、かく社會の一部に行はれてゐた確證のある以上、恐らく僧徒の間にも行はれたことと思ふ。普通の説では我が國の男色は佛徒に起り、それから他へ擴まつたやうに言はれるが（臆者考など）、必ずしもさう斷定も出來ない。佛敎渡來前からあつたかも知れない。

しかし文獻上、翫童の風が多く見えて來るのは平安時代末からである。雍州府志卷七にその概説が見えてゐる。

後白川院時、甚重男色。故堂上男子及十六七歳、剃眉毛、別以突墨造双眉、以白粉粧面顔、鉄漿染齒牙、臘脂傅爪端、專爲婦人之粧、自茲爲流例。雖爲夫人、染齒牙、聚頭髮於頂上、而結之、以是別堂上地下。(中略)。爾後寺院之喝食小兒亦倣之。云々。

この記事はごく正確とは言ひがたからうが、後白川院は平安時代末の天皇であらせられるから、その頃より男色の流行した事は、事實に當つてゐる。

先づ平安時代の文獻を二三あげて見ると拾遺集戀一にある。

大嘗會の御襖に物見ける所に童の侍けるを見て又の日遣しける 寛祐法師
あまた見しとよのみそぎの諸人の(二本)君しもものを思はする哉

といふ歌は、男色を詠じたと解する事が出来るやうである。續詞花集戀中に

房より西に、近隣なる人の許に侍る童に忍びて物申ける比月のあかき夜い
ひつかはしける。
律師 延眞

よがれせず浦山しくぞ西へ行月は人めもつゝまざりけり

同集戀下に

かたらひける童を怨じて、しばしとはす侍けるに、かのわらは文をおこせて
侍けるが(一本)薄墨にて書たりければ、
僧都 覺基

淡墨にかくにて知ぬ君はさは見えぬをよしと思ふなるべし

袋草紙卷三に

眞如院僧都公圓ハ定頼卿孫也。ワカ、リケル時、錦織ノ僧正行親許ニ侍錦織八郎ト云童ヲ得意ニテ侍ケリ。云々。

同書同卷に、又

梨下座主明快若侍時、蓮仲法師イカデ志ノヨシヲ欲達之間、不思議所ニテ契申テ、悦之餘ニ進名籍トテ制歌。云々。

鎌倉時代の著述であるがなほ平安時代の事を記した二三の例を引くと、古今著聞集卷八好色の部に、紫金臺寺御室に千手といふ御寵童有けり、みめよく心ざま優也けり。笛を吹き、今様なごうたひければ、御いごをしみはなはだしかりける程に、又參川といふ童初て參じたりけり。箏ひき歌よみ侍りけり。是も又寵有て千手がきらすこしをとりにければ、面目なしとや、退出して久しく參らざりけり。或日酒宴の事があつて、參上するやうに再三御使を千手の許へ遣されたから、やうく參つたが、物を思入つた氣色で、しめりかへつてゐた。「人々千手に今様をすゝめければ

過去無數の諸佛にも　　すてられたるをばいかにせん

現在十方の淨土にも 往生すべき心なし

たとひ罪業おもく共 引攝し給へ彌陀佛。

とぞうたひける。(中略)。きく人みな涙をながしけり。興宴の座も事さめてしめりかへりければ、御室はたへかねさせ給て、千手をいだかせ給て、御寢所に御入有けり。云々。」といふ名高い記事がある。

同書卷十五宿執の部に「白河院の御時時資をめして、御寵童二郎丸に貴徳納蘇利等の祕事さづくべきよし勅定有けるに、時資再三辭し申て教へず。(中略)。其後八幡別當頼清が寵童小院基政也石壽清方也をのゝに舞を習はせけり。云々。」といふ記事もある。

同書卷五「和歌の部」に、尙次のやうな二例があるが、平安時代の事か鎌倉時代の事か私には分らない。

醍醐の櫻會に童舞おもしろき年ありけり。源運といふ僧、その時少將公とて、みめもすぐれて、舞もかたへにまさりて見えけるを、宇治宗順阿闍梨見て思ひあまりけるにやあくる日、少將公の許へいひやりける。云々。

仁和寺佐法印威海法印師也わかくて醍醐の櫻會見物の次に寺中巡禮しけるにや。山吹

衣きたる童二人おなじすがたにて花見て侍ける。いづれもいみじくえんに覺えければ、たへかねて歌よみかけゝる云々。

序に鎌倉時代の例をそへると、増鏡秋のみ山の卷に前關白家平の事を

おほかたわかくてぞ、すこし女にもむつまじくおはしまして、この右大臣殿(經)なごもいでき給ひける。中ごろよりは男をのみ御かたはらにふせ給て、法師の兒のやうにかたらひ給つゝ、ひとわたりづゝ、いとはなやかにときめかし給ふ事けしからざりき。

と記してゐる。吾妻鏡寶治元年六月廿日の條に「駿河九郎重時。(中略)。是爲垂髮之比、辨僧正坊定豪就令寵愛之云々。」といふ記事もある。

但し兒の愛情生活について、關連して考ふべきことは、學問が出来、音曲に秀で、容顏の美麗な兒は、その一寺の名譽として、大切にし、他の寺まで、時としては他國までも、その兒の名聲がひいた事である。主として室町時代に行はれた「一兒二山王」といふ諺は、比叡山の鎮守の神たる山王權現よりも、名譽ある兒の方が第一に尊ばれるといふ意味であらう(藤井博士 諺語大辭典)。七十一番歌合に、

ひえあがる我獨ねのどことはにいちちごならぬ人ぞ戀しき。

戀しさにおこなふべきもわするれば我とくごうのほどぞしらるゝ、

左、一ちご二山王といふこと、よく思よせたり。右なら法師は、得業になるゆへにや。されどたいこうにこそ侍れ。とくは今より所なきにや。以左爲勝。

又「一寺の賞翫」といふ慣用句が屢、謠曲(關原、興市、鞍馬、天狗、滿仲など)に出て來るのも、同じ意味からである。

義經記によると、源義經がその妻や家來をつれ、北陸道を通つて奥州へ下つた時、家來ごもは山伏の姿になり、妻は兒姿になり、出羽々黒山の山伏及び稚兒と稱して、落ちて行く。途中越前の平泉寺に參拜した時、平泉寺の衆徒が、義經の一行たるを看破して、大衆を催して押寄せる。

衆徒申しけるは「抑も是はごこの山伏にて候ふぞ。打任せては止まらぬ所にて候ふに。」と申しければ、辨慶申しけるは「出羽の國羽黒山の山伏にて候ふ。」羽黒には誰と申す人ぞ。「大黒堂の別當に、讃岐の阿闍梨と申す者にて候ふ。」と答へけり。「少人をば誰と申し候ふぞ。」坂田の次郎殿と申す人の御子息、金王殿とて、羽黒山には隠れなき少人にて候ふぞ。」といひければ、衆徒これを聞きて「此の者共は判官にてはなき者ぞ。判官にておはしまさんには、いかでか是程に、羽黒の

案内をば知り給ふべき。金王と申すは、羽黒に名譽の兒にて候ふなるぞ。」
 義經記は小説であるから、必ずしも、右の引用文通りの事實があつたと信せられな
 いが、出羽の羽黒山の一人の兒の名聲が越前の平泉寺まで聞えてゐるほど、名譽の兒
 の評判は遠く傳聞されたものと見える。それ故、かゝる兒に對する一山、一寺の賞翫
 は、言ふまでもなく、熱烈なものであつたらうと思はれる。

稚兒が、かくの如くして、寺院生活の重要なエレメントとなつてくるにつれて、兒を
 描いた文學、繪畫等が多く製作されるやうになつた。又兒に關する傳説が多くなつ
 て來た。兒を描いた文學殊に小説は可なり數があるらしい。鎌倉時代からぼつぼ
 つ作られ、室町時代に最も多く現れ、江戸時代初にも若干作られてゐる。松帆浦物語
 幻夢物語、鳥部山物語、嗟峨物語、秋の夜長物語等が特に有名なものである。この五書
 は皆正續群書類從に收めてあるから、内容を紹介する必要はあるまい。兒物語は大
 抵作り話であるが中には、辨の草紙の如く實話もあるといふことである。(平泉博士
辨の草紙考)こ
 れらの物語は皆兒の愛情を中心としてゐるが、筋はどれも大體單純で、皆或僧と兒と
 の戀愛を取扱つたものである。當時はかゝる筋に似た實話も随分あつたと見える。

玉葉卷三十五、治承四年八月十二日の條に

傳聞、八條宮與房覺僧正、依愛童事、忽欲有鬪諍事云々。折節尤不便宜、不落居事歟。或云、伴童、行乘僧都童云々。

鎌倉大草紙卷下に千葉介父子が上杉に味方し、足利成氏に叛いたので、成氏の部下に攻められ、戦死した。下總國金剛授寺の僧中納言坊といふのは千葉胤宣の手習の師匠であつたが、切腹の由を聞いて、最期の場所たる如來堂へ來て、あとを戀に弔ひ、燒香し讀經した。時に如來堂の別當が出合ひ最期の有様を物語り、辭世の歌を示した。中納言はこの歌を見て涙を流し、ひれ伏してゐたが、やがて御堂の柱に一首の歌を殘して、近き邊の淵に投身して果てた話が載つてゐる。

諸所に殘つてゐる兒が淵、兒が池、兒塚の類も大抵兒に關する或悲劇を傳へるものである。殊に有名な相摸江の島の兒が淵の傳説は、微細な點は諸書に説くところが一致しないが、大體は昔、建長寺の僧自休藏主が、若宮別當僧正院(相承院と書く)の兒白菊を見そめ、色々言ひよつたが白菊は絶えて返事さへしなかつた。尙様々に言ひかけたので、白菊はせんかたなく、或夜まぎれて、江の島へ行き、此の淵へ身を投げた(鎌倉物語)。話は單純であるが、江戸に近いので、特に名高くなつたのであらう。

一人の兒を二人(又は二箇寺)で争ふ話も色々ある。沙石集第五卷下に、ある藏人なりけるが、子を山(此處)へのぼせたりけり。禪衆行人の房になんありける。みめかたちよろしき兒なりけるを、里へ下りたるつゝ、に、寺法師(三井寺の僧)すかしとりて、寺に置きてけり。山僧、此事を聞て、わが山は他寺の兒をこそ取るべきに、寺法師にしも取られぬること口惜しとて、大衆いきどほりのしりて先此の師の行人に事の仔細を問に、兒共の里に久しく候ふこと、常の習ひと存する斗也。三井寺に候はんこと、つや／＼承りおよばず、先づ狀をつかはして見候はんとて、紙と硯をとりよせて、かくぞ言ひやりける。

山の端に待つをばしらで月影のまことや三井の水にすむとは。

寺法師これを見て感じて、秀歌返事なしとて別の仔細に及ばず、山へ送りけり。

前に記した「秋夜長物語」はこれと似たモチヅの小説で、結末が山と寺との戦になり、三井寺が焼亡ぼされるといふ筋である。

藝術方面に於ける兒の表現を見ると「男色繪卷」といふのがある。醍醐寺三寶院所藏である。男色に關する小話を集めて、それに繪をそへたもので、一卷本である。もとより非公開的のものであつて、原本は私も見たことはないのであるが、尾崎久彌氏

の「江戸軟派雜考」所載で本文だけは活版本で流布してゐる三寶院本の奥書に「元享元六十八書寫訖」とあるから、鎌倉時代末のものである。畫風も字體もその時代に當つてゐるらしい。鳥羽僧正筆といふ説があるが、そんなに古いものではないといふ。

次に佛畫佛像に影響した方面を考へて見よう。

美術上には彫刻にも若干作られたのであるが、特に繪畫によつて、童形の文殊菩薩、聖徳太子、弘法大師が多く作られた。「兒文殊」とか「童形大師」とか言はれてゐる。遺品は多くないやうであるが、童形觀世音菩薩も色々作られたと見えて「兒觀音」といふ語もある。蜂須賀侯藏品の「兒觀音緣起」一卷は繪は鎌倉末期の土佐吉光の筆と稱せられ、奈良興福寺菩提院兒觀音の靈驗記ださうである（松岡映丘氏著、圖録繪卷物小釋）。謠曲「粉川寺」にも「當寺は兒觀音にて候ふ。」とある。

これらの藝術品につき、私は大部分は寫眞版又は木版畫を見たゞけで、實物を見たものは稀であるが、こゝにその概略を記しておく。

兒文殊は色々遺品があるやうである。原富太郎氏藏品は鎌倉時代初の名家藤原信實の筆と傳へられるもので、確證はないけれども、ほゞ時代は當つてゐるらしい。

理想化された靈獸としての獅子の上に、純粹に日本の鎌倉時代ごろの兒——水干垂髮の兒の乗つてゐる圖である。兒の服装容姿には少しも佛像式の遺風をとやめな
い。獅子は剛健な線を使つてことさらに正面に向しめ、左右相稱に描き、犖惡な顔面
を一層犖惡に感せしめるやうに描いてあるのに比して、兒は繊細な線を使ひ、女のや
うな柔婉な優雅な風姿を寫し、しかも側面むきにして、姿勢を自由にし、一層やさしい
感を豊かならしめてゐる。松方公爵家の「稚兒文殊」も藤原信實筆と傳へられるが、時
代はずつと下る。恐らく鎌倉時代末のものであらうが、その相好は前者と全く違つ
て、劍を右手に持ち、三鈷を立てた蓮華を左手で捧げた八字文殊を童顔で表現したた
けである。大原三千院什寶の「兒文殊座像」は土佐光重筆と稱し、時代も下り、繪も落ち
るが、やはり佛像式である。

童形大師で有名なのは村山龍平氏藏品である。これも藤原信實筆と稱せられて
ゐる。袴をはき、合掌して圖相内の蓮座に坐してゐる童兒の姿である。時代は下る
が高野山の定光院、清淨心院等、山城の醍醐寺にもそれ／＼童形大師畫像が遺存して
ゐるさうである。

童形の聖德太子の像も色々ある。その最も古いのは木像であつて、今日法隆寺の

繪殿に安置してあるものであるが、太子七歳の御影で、頭髮を左右に分け、みづらに結び、手に塵尾を執られる坐像である。胎内に墨書があつて治暦五年佛師圓快の作であることを示してゐる。いかにも優美端正にして、しかも氣高いお姿である。鎌倉時代以後十六歳の御影といふものが、諸所に造られた。繪畫では仁和寺のが最も著名で繪もすぐれてゐる。童形で袈裟をかけ、柄香爐を手にして居られる。眉が秀で、眼をやゝ細くして、いかにも賢明な御様子に寫してある。この御姿の彫刻は大和橘寺その他に少くないさうである。又太子二歳の時合掌して南無佛と稱して東向いて禮拜されたといふ傳説によつて作つた「太子二歳南無佛」の像といふのがある。裸形で袴だけをつけ、合掌し給ふ像である。これも諸所に安置されてゐるらしい。

童形の文殊菩薩、聖德太子、弘法大師の像が特に多く造られたのは、色々の理由が有らう。しかし寵童の風俗が流行するにつれ、個人間の愛情が、一山の尊重となり、更に超人化されて崇拜の對象にまで理想化したとも見ることが出来るやうである。太子の像の多いのは、我が國佛教繁昌の大恩人であることが根本である。しかしその意味の尊崇から御肖像を造るならば、強ち童形に造る必要はない。勿論御成年後の

御像も色々數多くある。けれども童稚の御像の多いのは、童形に示さうとする作家の心中に、意識的にか無意識的にか或意圖が働いてゐたと見られるのである。文殊菩薩や空海についても同様である。そこには確に翫童の風習がその根本のモチーフになつてゐるやうである。又男色は文殊や空海が始めたといふ説は兒文殊や童形大師の造像が廣く行はれてから後に起つた説であるらしく恐らくこの造像の流行から一轉して、かゝる起源論が起つたものであらうと思ふ。

更にもう一つ注意すべき事は、文殊菩薩は智慧の權化と仰がれる菩薩である。聖徳太子、弘法大師は共に類まれなる智者賢人である。かく、兒が文殊、太子、大師の如く智の權者で表現されてゐることは、當時の兒に教育が可なり盛んに行はれ、兒に對しては學問することを一の條件として一般に希望された爲に、文殊や大師の形をかりて兒の學問を或は又利發な兒をかく理想化したのではあるまいか。世鏡抄に兒の姿は文殊菩薩にかたざると記してあるのも、右の消息を物語つてゐるやうである。

六 兒登山の教育目的

今まで述べた兒では、僧侶になる希望のものど、希望のない者との區別は、兒個人に

ついで見れば出来るが、一般的に概観すると區別はつかない。とにかくこれらの兒は家庭と違つて、訓育上にも知育上にも、いろ／＼薰陶される事が多かつた。僧侶が學問する事は言ふまでもないから、兒は寺で内典、外典の學を學ぶことが出来る。又兒は多くの他人の中でも、まられるのであるから、江戸時代に、可なり身分のよい町人でも、その子女を他家へ奉公させたと同じやうな徳育上の効果は寺の兒の場合にもあつたであらう。まして一子出家すれば九族昇天すといふやうな信仰が盛んに信せられた時代であるから、かた／＼戰敗など非常な機會に迫られなくても、登山させて、教育を受けさせ、もしくは出家させて、父母の菩提を弔はせようといふ風習が廣まつたらしい。

親が子を登山させるのに、教育を受けさせる事を目的として登山させる事は、可なり昔から、即ち平安時代末には有つたやうである。東山往來拾遺に

昔田夫誘子、令住叡岳。子學聖教。不了世路。同伴來謁言、汝子如文殊也。父聞歎譽。子適來到。父勸令書借文。又問世法。子不書不答。父瞋白、汝爲愚人、豈是

文殊哉。子還學世間雜事、遂成内外達者云々。近代學者、須共求内外法、淺深同學矣。

とある。しかし、この田夫の子が世俗の學を學んだのは、出家した後か否か、分らないから、兒の教育の例として引く人もあるが、必ずしも適例とは言へない。もつと明瞭な例は、新十二月往來にある次の例であらう。

染付直垂一具、扇子三本、七日料獻之。常令經廻洛陽給之條、不便之事也。爲學問早可令登山之狀如件。

七月三日

直垂扇等謹以給候了。住京之條存外之事候。阿闍梨爲貴所御祈、數日被登山之間、自然令經廻候。於學問者、雖在京、不怠候也。恐惶謹言

七月三日

今若丸 請文

この往復の文で明に知られる如く、父からその子今若へあてた手紙と今若の返事とである。今若丸とあるから、まだ兒にきまつてゐる。かつ學問を力説してゐる事は明白である。東山往來はその拾遺の第四十八の手紙、寛治五年（七五〇）清水寺焼亡の記事がある。しかも、この書の成立は、その記事の内容より見て、寛治五年からあまり多くの年數を經てゐないやうである。又第五十六の手紙に「故一院第四宮、被納當帝之女御之後、以正月有中宮之宣旨」とある。寛治は堀河天皇の年號である。當

帝は必ずや堀河天皇以後の天皇である筈である。さうしてこの「故一院第四宮云々」の記事は架空の記事でないと思へば、この記事によつて著作年代をほゞ推定出来るであらう。堀河天皇以後で、右の記事に最もよく適合した中宮を調べると、鳥羽天皇の第四女で、二條天皇の中宮高松院の御事であらうと思ふ。高松院は平治元年（一八一〇）二月廿一日に中宮となられたので、前の記事の「正月有中宮之宣旨」と一致しないが、これは記者の誤記であらうと思ふ。さうすると二條天皇が當帝にあたり、天皇の踐祚された平治元年から、永萬元年（一八二五）に二條天皇が六條天皇に讓位されるまでの六年間に出来てゐるものであらう。（註）

新十二月往來はその二月の條に深草の最勝光院に詣でる記事がある。最勝光院は承安二年（一八三二）に建春門院の御願によつて建立し（百練抄）、嘉祿二年（一八八〇）に炎上し衰頽した寺である（明月記）。嘉祿の炎上以前は頗る壯麗な寺で、天下第一之佛閣と惜まれた（同書）。新十二月往來はこの間に出来てゐるらしい。普通に藤原良經（一八二九—一八六〇）の作と言はれるのは、どれだけ確實性があるか、私には分らないが、時代は當つてゐる。従つて新十二月往來の方が東山往來より少し後れて、平安時代末から鎌倉時代へ移らんとする頃の著である。（註）その中に上記引用の如く、親がそ

の子たる寺の兒に學問を勸める記事があるのである。新十二月往來は内容より見て明かに教科用として作られてゐる。教科書にはごく特殊な風習を書くわけがないから、平安時代末には既にかゝる風習が可なり廣く行はれてゐたかと思はれる。けれども今若丸は僧侶になる志望で登山したか。僧侶になる志望がなかつたのか明瞭でない。

一般に兒の登山の目的を明かに學問又は修徳に置くことを、明言するやうになつたのは鎌倉時代からと見てよいやうである。少くとも、目的を學問や修徳に置くことが文獻上多く見られるやうになつたのは、鎌倉時代、それも中期以後の事であるが、室町時代に入つてからは兒に關する記事は大抵學問や手習に關してゐる。前記第四節に引いた長門本平家の木曾義仲の養ひ親が、幼少ヨリ手習シテ學問ヲモシ法師ニナシテ、父母の孝養をさせようと考へたのは、恐らく鎌倉時代末の一例と見てよからう。

室町時代になつて義經記に

常盤が子供成人するに隨ひて、なか／＼心苦しく、……たゞ法師になして跡をも弔ひてなんぞ思ひて鞍馬の別當、東光坊の阿闍梨は義朝の祈師にておはしける

程に、御使を遣して仰せけるは、義朝の末の子、牛若殿と申し候ふを……おだしき心もつけ、書の一巻をも讀ませ、經の一字をも覺えさせて給はり候へと申されければ、……その後晝は終日に、師の御坊の御前にて、經を讀み書學して、夕日西に傾けば、夜の更け行くに、佛の御あかしの消ゆるまでは共に物をよみ……學問に心をのみぞ盡しける。」

とあり、明かに佛敎の經典を讀み、俗典を讀む知育と、おだしき心をつける徳育との二つを目的として登山させたのである。これが室町時代ごろの兒の登山の世間一般の目的であつたものと思はれる。室町時代に多く作られた兒物語は、兒が學問の爲に登山する事を、詳しいか、簡單かの別はあるが、大抵何か書いてゐる。

尙二三の例をあげて、本節を終ることにする。「柿本の系圖」には
 三郎なりけるは容ふつゝかにして、かたくななれば、比叡の山にのぼせ、學問させけるが、云々。

不良性を帯びた子を寺へ登して、善良な子に訓練する企ては屢、文獻に見られる。
 例へば關八州古戦録第四卷に

息男文六郎……不敵ナル生得ニテ放逸ナル振舞多カリシ故、姉是ニ持テ扱ヒテ

夫ノ景井ニ相議シ、岩井山ノ城邑ニ有リシ密宗ノ寺院ヘ入テ出家ナサシメ置タ
リシガ云々。

といふ例もある。

「花みつ」にも、岡部はその二人の子供の成長した曉言ひ甲斐なく振舞ひたらん時は
主の恥、我家の恥ぞかし、思へば山寺へも上せばや。」と思つて、その子花みつを書寫山
へ上げるのである。(以下次號)(昭和二年九月)

註(一)東山往來に載せてある中宮の記事が絶対に史實であると確信することは無理であると非難する人もあるかも知れないが、東
山往來にある具體的な事實の記事は大抵史實にあふやうであるし、「故一院第四宮、被納當帝之女御之後、以正月有中宮之宣
旨」といふやうな、ごくパーチキュラーな事は架空には書けないであらうし、且、二條天皇の中宮高松院に殆ど一致するから、
史實と見てよからう。

(二)最勝光院は嘉祿の炎上後退轉したかどうか確證はないが、この院を建立された建春門院は平氏の女であるから、鎌倉時代は
この寺が維持にさへ苦しみ、炎上前院に衰微してゐた。故に炎上後は再建されなかつたと思ふ。よし再建されてもとも立
派なものでは無かつた。新十二月往來には稻荷に對する大寺院として示してある。故にこの書は炎上前の書であらう。

前號の主な誤

頁 行 誤

正

六三 六 實例七二頁

實例六三頁

六八 九 不レ一

不レ一(ルビの一は不用)

七〇 一一 善哉童子

善哉童子